

薬史学会通信

No.11 1990年 9月

〒192-03

東京都八王子市堀之内1432-1

東京薬科大学内

日本薬史学会事務局

日本薬史学会

西部支部設立総会ご案内

日 時 : 1990(平成2)年10月13日(土)

13:30 ~ 16:00

場 所 : 大阪市中央区道修町2丁目6番8号

大日本製薬株式会社本社 七階ホール(地図参照)

次 第 :

13:30 設立総会 ・設立経過報告

・学会長挨拶 野上 寿 会長

・支部活動の方針説明

・支部役員の選考

・その他

14:00 記念講演

1. 宗田 一氏(薬史学会 幹事)

『薬史研究あれこれ』

2. 高島 英伍氏(摂南大学薬学部長)

『わが国の薬学における衛生学の発展』

○当日は非学会員の方の御参加もお誘い合わせ下さい。

連絡先:大阪大学薬学部 米田 該典 06-877-5111 内線6146

集談会予告

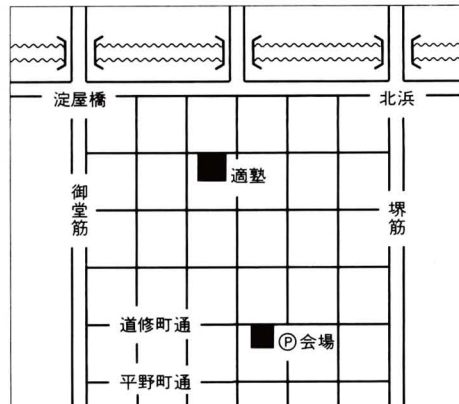
日 時:1990(平2)年12月1日(土)

13:30 ~ 15:30

場 所:星薬科大学(予定)

講 師:渡辺 徹 氏

演 題:厚生行政の変遷(仮題)



日本薬史学会総会報告

日 時：1990年4月7日(土) 11:00~12:00

場 所：品川区荏原2-4-41 星薬科大学医薬品化学研究所ホール

本紙10号に予告したように、本年度は本会独自の総会行事と特別企画を行った。

まず定刻より評議員および幹事合計25名の参加を得て評議員会を開催、それぞれより薬史学および薬史学会について所信が開陳された。

11時30分より総会行事に入り、89(平成元)年度活動概要および決算案が報告され、さらに90(平成2)年度事業計画と予算案が提出され、審議の末可決された。

主要内容としては：永年の懸案であった西日本支部が発足できる見通しになったこと、学会活動のパロメーターのひとつである薬史学雑誌への投稿量が増加し、それに伴う投稿規定の大巾改訂。また、会則の一部を変更した。最後に新役員を選出し総会を終了した。

新年度に提出された事業としては：西日本支部設立の実行と、学会活動に貢献した会員や、すぐれた研究成果を挙げた人の表彰、そして会員拡大のための施設検討が挙げられた。

午後は大槻真一郎幹事の監修になる科学ビデオ「医学・薬学の父 ヒポクラテス」上映の後、薬学現代史シンポジウム、歴史の目による薬学教育の検討が行われた。開会に先立ち、野上寿会長は次のように挨拶した。

『学術の盛衰は、その領域の人々が、教育の課題に対して真正面から取組むか否かにかかっている、と常々より考えておりました。

今日まで私が、薬学教育協議会ほか、各種教育検討の事業に関わって来たのも、このような思いがあったからです。

しかし、当時の社会的条件や薬学内部の事情などに左右されて、必ずしも意に満ちた成果は挙げられませんでした。

本日ここに薬学教育を、歴史の目、つまり、

時代や周囲の情勢に応じて事物は刻々に変化するという立場に立って、総合的に検討する機会を持つことができました。

今後とも、このような課題の検討を重ね、日本の薬学の健全な発展に資する考えでありますので、皆様、宜しくお願いいたします。

終りになりましたが、会場を貸して頂いた星薬科大学に深く感謝いたします。』

シンポジウムは、各演者の紹介も兼ねて、「歴史の目」を持つことの意義について川瀬清幹事が冒頭に話した後、戦後日本の産業界が、自らの近代化を産業人教育に求めて来た経緯を、日本薬剤師会の久慈光亮氏より伺い、次いで、旧来の薬学教育の反省の上に福山大学で臨床薬学教育を開始している状況について菅家甫子教授より、続いて化学教育研究を専門にしておられる林良重先生から、教育とは個別知識の伝授ではなく啓発的な創造性の育成である旨を伺った。

追加発言として、水野薬局の水野睦郎氏は真の薬剤師教育は人間教育でなければならぬこと、続いてコンピューター支援による薬学教育の実践例を神戸学院大学の山岡由美子先生より伺い、討論に入った。

参加者は約60名。内訳は評議員・幹事など学会関係者25、大学・研究所15、薬剤師会6、企業4、一般7、報道3であった。

当初意図した「歴史の目による」検討は、取扱った課題の広範さ・奥深さに比べて徹底できなかった嫌いはあったが、参加者、特に教育関係者から新しい視点を得た、との感想を得て、16時過ぎに散会した。

なお、吉井千代田名誉会員より、関連参考資料として薬事日報平成2年4月5日号「薬学教育への小提言」のコピーが配布された。

(8) ヨーロッパ医薬学の伝来

宗 田 一

8-1 南蛮系医薬学

ヨーロッパ世界の飛躍的膨張（いわゆる大航海時代）の波及によって、16世紀後半に日本はヨーロッパ文化に接する。その第一陣は、南部ヨーロッパのスペイン・ポルトガルを主体にした、いわゆる南蛮文化であった。

ヨーロッパ・インド洋航路をおさえたポルトガルは、インド洋貿易を独占するとともに植民地経営の手段として民心帰服のためにキリスト教の教化力を利用し、多教の宣教師を送り込んでキリスト教伝道に従わせた。

ローマ教皇によって布教の勢力圏をインド・中国・日本としたポルトガルは、明政府の倭寇鎮圧によって一掃された南シナ海の中国人海商による日中私的貿易の空白期をねらって中国に進出、マカオの割譲を得て対日貿易の拠点とした。一方、西廻り航路を目指してきたスペインは、アメリカ新大陸から太平洋に出てフィリピンに進出、豊臣秀吉の代に日本へも進出して、日本はポルトガル・スペインの文化に接したのである。

両国は、布教活動の一環としてヨーロッパの医療を導入した。これら南蛮人によって伝えられた医学を総括して、広義の南蛮医学というが、狭義には布教下におけるキリシタン医療と、鎖国政策によって禁教された布教に無関係な残存した医学を南蛮医学と区別する場合もある。

キリシタン医療

キリシタン弾圧によってキリシタン医療に関する国内史料はきわめて少いが、豊後府内（大分）に設けられたキリシタン病院では医療は、内科は漢方系、外科は洋方外科であり、洋方の技術水準も中世の教会医学の伝統の枠内にあったようで、その実体は明確ではない。

しかし、キリシタン医療で注目すべきは、たんに病院における治療行為にとどまらず、

教会医学的性格の新しい医療組織活動を導入した点に特長がある。それは当時の仏教界の盲点をつくもので、この活動を通してキリシタン医療は民衆の熱烈な信頼を勝ち得たとみねばなるまい。

その組織とは、オスピタリ（Hospital）とミゼルコルジア（Misericordia）で、その運営には日本人信徒の医療ボランティア組織によって行われたのである。

オスピタリは、病院の世話組織で養生屋と呼ばれ、ミゼルコルジアは、救貧・救病・救癩・防犯・孤児院・養老院・寡婦の救済・貧死者の埋葬等を含む広汎な救療活動組織で、慈悲屋と呼ばれた。

キリシタン弾圧下にあっても、ミゼルコルジアの施設・病院は破壊を免がれ存続していたが、長崎の場合をみると、元和6年（1620）にようやく破壊、寛永10年（1632）にそのときの会頭の薬種商ミゲルが殉教して解散したと伝えられる。

南蛮流外科

キリシタン禁令後も存続した南蛮医学のうち、南蛮流外科の代表の一人とされるのが、“転びバテレン”のポルトガル人クリストヴァン・フェレイラで、日本名を沢野忠庵というが、中庵が忠安かという指摘（中西啓『長崎のオランダ医たち』岩波新書、1975）があり、海老沢有道は、南蛮流が名称をかえて蘭学に接したとして、南蛮流の江戸前期における影響を重視（『南蛮学統の研究』創文社、1967）しているが、阿知波五郎（『近代日本外科の成立』1967；『近代医学史論考』思文閣出版、1986に再取）は医学の面から、宗田（薬事日報No.3439、1964；なお『図説日本医療文化史』思文閣出版、1989も参照）は薬学の面から論及し、南蛮から蘭学への移行は、少くとも医薬学についてみる限り、漸をもって移行すべ

きだとした。

南蛮流外科のもう一つの代表の栗崎流については、戦後の新史料発掘で、従前の記述の大幅な修正が必要となって来た(竹内真一「越前栗崎家文書とその周辺の人々」、『日本医学雑誌』復刻版月報No.16, 思文閣出版, 1979にその展望が要約されている。なお、越前栗崎家文書については、伴五十嗣郎が『実学史研究』Ⅳ, Ⅴ, Ⅵ, 思文閣出版, 1987-1990に活字化し、全文発表, 目下継続中である)。

このように、南蛮流の考察については、新史料の発掘が優先する分野で、古い成書の意見をそのまま引用することは十分注意すべきである。

なお、南蛮流外科は膏薬療法で、時代が下ると漢蘭折衷し変貌して行くので、海外史料の発掘はもとより、国内史料でも書誌的に十分おさえておかなければ、当初の姿が浮び上ってこない。

さらに、南蛮流に言及する場合、忘れてならないのは、創傷洗滌用の蒸留酒一焼酒であり、蒸留酒は南蛮流外科において最初に登場するものであるだけに、蒸留酒伝来史とその製造史は、薬史領域の重要なテーマの一つである(宗田：前掲書参照)。

8-2 紅毛系医薬学

鎖国下に伝来した医薬学は、北部ヨーロッパのオランダ船によってもたらされ、オランダ人の髪の色にちなみ紅毛系と呼ばれる。

南蛮流が忠庵流で代表されるならば、紅毛系はカスバル流で代表される。

カスバル流についても、戦後の研究で大幅な修正を要する領域となっている。その研究史についての展望は宗田(「展望・紅毛流カスバル研究」、『日本医学雑誌』復刻版No.10, 1979)による要約があり、カスバル流の使用した膏薬(カスバル十七方)についても宗田〔医薬ジャーナル14(5), p. 113~9, 1978, なお前掲書参照〕は新見解を提示している。

さらに近時、カスバルの国籍がドイツであることが判明、没年も1706年4月4日でLeipzigのGrimmische Gasseで83歳で没したこ

とがW.Michelの研究によって明かとなり、カスバルの生国での動向も次第に明確になりつつある〔ミヒェル・ヴォルフガング：出島蘭館医カスバル・シャムベルゲルについて、日本医学史学雑誌, 35(2), 1989; Wolfgang Michel: Caspar Schambergers "Leben = Lauff", 言語文化論究, 九大独仏文学研究会, 1990〕。

8-3 通詞系医薬学

長崎のオランダ通詞は、来日の蘭館付医師や薬剤師と直接接する役職なので、海外の医薬情報を得る機会が多く、通詞の中から医薬学を修める者が出て来て、通詞系医薬学が育つ。

蘭館医らが長崎郊外で薬草を採集し、その薬草名や効能を通詞らが和訳したものとして『阿蘭陀薬草功能之書』(写本, 1670)があり、数年採集が続いたようで、その採集実状や江戸幕府に随行した通詞らがその途上で蘭館医から聞き出した薬草の知識などが断片的ながら記録されているので、関連史料探索によってその実体の深まりを向後に期待したい。

また、長崎で公式製薬伝習が行われた最初の記録として、寛文12年(1671)3月のものが知られ、その伝習に当たったオランダ人薬剤師の名も現在まで不明のままであるが、この内容は後代まで伝写されてその影響は長く続いている。

蘭館付医師として著名なテン・ライネやケンペルについても、まだまだ調査すべき点が多く、たとえばケンペルが海外に紹介した日本産薬用人参と称するものがムカゴニンジンの誤認だったことは宗田〔医薬ジャーナル, 21(10) p. 325-9, 1985〕が指摘した。

またツェンペリーが伝授した駆梅用水銀剤の課題〔宗田：実学史研究Ⅱ, 思文閣出版, p. 3-32, 1985; また前掲拙著参照〕も含め、通詞系医薬学のテーマは豊富である。

さらに通詞系の多くの著訳書の原典・参考書の類についても調査すべき問題が残されている。

ドイツ薬史学会について

山田光男

前報(薬史学会通信10号)のアメリカ薬史学会に次いで、今回は、日本薬史学会と密接な関係にあるドイツの薬史学会について述べる。

ドイツの薬史学会は、1924年(大正13)当時のドイツ首都ベルリン市で、国際薬史学会、Internationale Gesellschaft für Geschichte der Pharmazie e. V. (以下当会)として創設された。

第2次大戦の敗戦によりドイツは東西に分割された為、当会は西ドイツに移り、その事務局をBremen市において現在に至っている。今回の東西両ドイツの統合後、あるいはその本部の移動も将来はあるかも知れない。

資料としては多少古い1984年(昭和59)の調査によれば、当会の会員は、世界の約30ヶ国に2000名近い会員がおり、会長はハンガリーのDr. Károly Zalaiとのことであった。西ドイツ国内の会員は約800名であり、年会費は西ドイツ通貨で45 D.M.である。その年会費請求書は、英・独・仏の3ヶ国で記載されており、その国際性が、かいま見られるといえよう。定期刊物物としては次の2種が発行されている。

1. Beiträge zur Geschichte der Pharmazie
2. Pharmaziegeschichte Rundschau

当会への入会を希望される方は、外国為替取扱いの銀行で45D.M.の送金小切手を作成して下記宛に送金すればよい。

おたずね

上記共同研究に関連して、1975年講談社出版の『舎密開宗』および『舎密開宗研究』の入手を希望される方が居られます。出版元に

(会計担当幹事) Dr. Gerald Schröder,
Apotheker.

(住所) D-2800 Bremen, Graf-Moltke-
Straße 46, F.R.Germany

以前送付された会員名簿によると、日本での同会々員は、奥田潤先生(名城大)と小生の2名であった。是非、日本薬史学会の会員が多数当会に入会されることを期待する。

日本薬史学会と当会の関係について述べると、1983年(昭和58)、当会幹事のDr. Wolfgang Götzとの出会いにより、その交流が始った。同博士はドイツMerck社の国際部長という職務の一方で薬史学に興味をもち、有名な化学者Johann Bartholomäus Trommsdorff(1770~1837)についての研究で学位を取得している。

同博士は、1985年(昭和60)来日の折には、日本薬史学会集談会で「ドイツ薬剤師教育史」について講演し、また薬史学雑誌24巻1号にJ. B. Trommsdorff執筆の化学教科書が「舎密開宗」として日本に紹介され、当時の鎖国時代のわが国に与えた影響について報文を投稿している。同博士の提案により近く、ドイツからイギリス、オランダを経て「舎密開宗」が宇田川榕菴の手に入った当時の経緯についての国際的な共同研究の企画も進められている。

なお同博士の好意により日本薬史学文庫(明治薬科大学世田谷校)にIllustrierte Geschichte der Medizin 全8巻が寄贈されているので、閲覧希望の方は明治薬科大学大槻真一郎教授に連絡されたい。

ドイツ語圏にある隣国オーストリア薬史学会について簡単に触れると、創立は1926年(大正15)、会員数は160名(1984年)であり、本部は、Wien市Spitalgasse31,1090Austriaに所在する。

も在庫が無くなり、古本市場にもあまり出ないと言うことで、もし、会員で譲渡を引き受けて下さる方が居られたら、本会事務局までご一報下さい。(日本薬史学会事務局)

日本薬史学会・平成1(1989)年度収支決算

平成2～3年度役員

収入の部

	子 算	決 算	増 減△
前年度より繰越	780,427	780,427	0
賛助会費	900,000	1,260,000	360,000
一般会費	1,200,000	1,305,000	105,000
学生会費	8,000	2,000	△ 6,000
外国会費	20,000	0	△ 20,000
投稿料	200,000	574,147	374,147
広告料	80,000	35,000	△ 45,000
雑誌販売	10,000	3,500	△ 6,500
雑費	2,500	91,723	89,223
利子	3,000	1,790	△ 1,210
寄付	0	0	0
計	3,203,927	4,053,587	849,660

支出の部

	子 算	決 算	増 減△
印刷費	1,550,000	2,684,937	1,134,937
通信費	100,000	72,865	△ 27,135
事業費	300,000	148,636	△ 151,364
事務費	100,000	42,782	△ 57,218
雑費	200,000	73,597	△ 126,403
計	2,250,000	3,022,817	772,817
繰越残高	953,920	1,030,770	

平成2(1990)年度収支予算

収入の部

	前年度	子 算	増 減△
前年度より繰越	780,427	1,030,770	250,343
賛助会費	900,000	1,020,000	120,000
一般会費	1,200,000	1,200,000	0
学生会費	8,000	2,000	△ 6,000
外国会費	20,000	20,000	0
投稿料	200,000	420,000	220,000
広告料	80,000	80,000	0
雑誌販売	10,000	10,000	0
雑費	2,500	10,000	7,500
利子	3,000	5,000	2,000
寄付	0	0	0
計	3,203,927	3,797,770	593,843

支出の部

	前年度	子 算	増 減△
印刷費	1,550,000	2,000,000	450,000
通信費	100,000	100,000	0
事業費	300,000	300,000	0
事務費	100,000	100,000	0
雑費	200,000	200,000	0
計	2,250,000	2,700,000	450,000
繰越残高	953,920	1,097,770	

会長 野上寿

幹事 長沢元夫(会長代行)

石坂哲夫, 江本龍雄,

大槻真一郎, 川瀬清

滝戸道夫, 山田光男

米田該典, 青木允夫

宗田一, 難波恒雄,

監事 田辺普

評議員 市川正孝

井上隆夫, 井上哲男

遠藤浩良, 小原正明

奥田潤, 奥田拓男

大塚恭男, 大橋裕

金久保好男, 金庭延慶

岸本良彦, 北川勲

喜谷喜徳, 木村孟淳

桑野重昭, 久保道徳

小林凡郎, 岩崎由雄

小山鷹二, 三川潮

清水龍夫, 清水正夫

杉原正泰, 高昌英伍

田端守, 滝野吉雄

辰野高司, 富松利明

名取信策, 中川富士雄

中村健, 中室嘉祐

浜田善利, 播磨章一

平賀敬夫, 久道周次

藤村一, 古谷力

堀岡正義, 堀越勇

松浦博, 松本仁人

水野瑞夫, 宮崎元一

森田直賢, 山内辰郎

山川浩司, 山崎和男

山田久雄, 山田健二

吉岡信, 藤井正美

渡辺徹

名誉会員 木村雄四郎

吉井千代田, 根本曾代子